

# 昭和 61 年度 秋季 大会 概要

## 1. 学術講演会

北海道大学の学術交流会館及び百年会館を講演会場として2日間にわたり4会場、75件(A講演47, B講演28件)の講演発表と過去最多となり、中国・韓国・西独より各1件の発表で国際色豊かな講演会であった。

講演内容はエンジン系(49), ボデー系(19), シャン系(16), 動力伝達系(3), エレクトロニクス(1), その他(12)と社会的ニーズに応えるもの、新技術開発, 基礎的研究等理論的にも実験的にも充実した講演内容となった。〔( )内彰〕

座長には近久武美(北海道大), 高木靖雄(日産), 福谷格(職訓大), 石田靖彦(トヨタ), 細井賢三(自動車研究所), 茄子川捷久(北海道自動車短大), 林 靖享(豊田中研), 小口泰平(芝浦工大), 吉本堅一(東大), 大野進一(東大), 梅沢清彦(東工大), 景山一郎(日大), 岡田 正(マツダ), 常本秀幸(北見工大), 作道清(三菱自工), 宮本 登(北大), 古山幹雄(千葉大), 山崎嘉彦(いすゞ), 林 重信(室蘭工大), 樋口健治(名城大), 永田勝(大阪産大), 北原 孝(いすゞ), 堀内 数(北大), 森沢正旭(武蔵工大), 安部 宏(本田技研)の各氏が担当された。

講演発表テーマ及び発表者は別表に記載。

## 2. 研究懇談会

10月2日(木) 12:00~13:40

積雪寒冷地問題特設委員会(加来照俊委員長)の企画により開催。冒頭, 特設委員会の茄子川捷久幹事(北海道自動車短期大学)から本委員会の設立主旨ならびに委員会活動の経過とその成果等に詳しくふれたのち, 主題の「スパイクタイヤ問題」について加来照俊氏(北海道大学)より冬期における路面とタイヤ関連の最近の研究状況について自動車技術と道路環境の関連で解決すべき課題の話題提供があり, 活発な討論が行われた。(参加者67名)

## 3. 特別講演会

10月1日(水) 16:20~17:20

講師 木村 汎氏(北海道大学教授・スラブ研究センター長)  
村山 正北海道支部長の司会により, 最近のソ連情勢について, ゴルバチョフの登場により, ソ連の内・外政はどうか, 世界第1級の研究者の含蓄深いお話をいただいた。聴講者248名。

## 4. 第36回(秋季)自動車技術会賞授賞式

10月1日(水) 17:50~18:20

懇親会に先立って札幌全日空ホテルで17:50から自動車技術会賞・学術貢献賞, 技術貢献賞の授賞式が行われた。

受賞者は, 学術貢献賞が佐藤 豪会員, 技術貢献賞が田中次郎名誉会員及び中村良夫会員で, 参加者の盛大な拍手に迎えられ, 関会長から賞状と副賞のメダルが授与された。(別掲)



第36回技術会賞授賞式で  
あいさつする関真治会長



特別講演会・最近のソ連情勢について, 木村汎北大教授

## 5. 懇親会

続いて同じ会場で懇親会が開催された。参加者は161名であった。

関会長のあいさつに始まり, 来賓の北海道大学有江幹男学長の祝辞, 村山正北海道支部長の挨拶があり, 中川良一名誉会員の乾杯により開幕した。

5年振りの北海道での開催とあって全国から多数の参加者があり, 地元から参加された新進の会員の方々を加え, 第1日の学術講演, 木村教授の特別講演の熱気を反映し, 大変な盛況であった。

19:20 来賓の九州大学佐藤教男工学部長からしめくりのあいさつがあり, 印象深い懇親会を閉じた。

## 6. 見学会

恒例の見学会が10月3日(金)成功裡に行われた。賛助会員各社のご協力により, 今回は見学先9班の編成で参加者の総数は504名であった。

見学先	参加者
第1班 札幌市交通局	20名
第2班 鈴木自動車工業	79名
第3班 全日本空輸	70名
第4班 大金アールエム, いすゞ自動車	35名
第5班 トヨタ自動車	90名
第6班 日産自動車	62名
第7班 日本電装	35名
第8班 日本発條	31名
第9班 日野自動車工業	82名

## 第36回(秋季)自動車技術会賞

(賞の種類及び対象)  
学術貢献賞

学術貢献賞は, 自動車に関する学術の進歩発達に貢献し, その功績が顕著な個人。ただし, 既に在来の斎藤賞又は中川賞を受賞した者を除く。



コーヒーブレイクの会場では多数の会員による技術交流が行われた



第36回(秋季)自動車技術会賞受賞者  
(左から佐藤豪, 田中次郎, 中村良夫氏)

### 技術貢献賞

技術貢献賞は、自動車に関する技術の進歩発達に貢献し、その功績が顕著な個人。ただし、既に在来の斎藤賞又は中川賞を受賞した者を除く。

## 授賞概要

### 1. 学術貢献賞

#### 佐藤 豪君

佐藤 豪君は、永年にわたり原動機の研究に従事し、その造詣は広く関係研究者の規範となり、研究成果は自動車のみならず、その他の原動機にも広く活用され、その発展に寄与している。

特に、氏は、ディーゼル機関の燃料噴霧の液滴の微粒化、噴霧の空間的構成、噴霧の挙動の研究など、燃料噴霧性状に関する基礎的解析成果に立ち、その燃焼特性を解明し、ディーゼル機関の重要課題である燃料噴霧～燃焼～排気に関する研究を体系的に推進し、ディーゼル機関のみならず内燃機関からガスタービンに亘る自動車用原動機の進歩のために、工学・技術の両面への大きな貢献をした。

又、最近環境問題として、きわめて重要な課題となっているNOx, すずの生成を体系的に明らかにするとともに、すずの生成抑制に関する新しい知見を導くなど、これらの排出ガス成分の低減について大きな貢献をした。

同君の数々の独創的な研究成果は、昭和54年の造船学会賞55年の日本ガスタービン学会賞及びSAE(U.S.A.)のColwell賞に見るように、内外において高く評価されている。

以上の通り、同君のディーゼル機関に関する永年の幅広い研究による内外の自動車工学の進歩に貢献する所、極めて大なるものがあり、学術貢献賞の候補者としてふさわしいものと考えられる。

### 2. 技術貢献賞

#### (1) 田中次郎君

田中次郎君は、戦後の経済混乱と燃料不足の時期において、いち早く電気自動車の技術開発にとりくみ、優れた性能の電気自動車を開発し、国民生活に不可欠な運輸交通手段を提供したのに始まり、今日に至るまで終始一貫中・小型自動車の技術開発に尽瘁し、我が国の自動車技術の進歩発達に大きな貢献をしてきている。

すなわち、技術開発にあたっては、常に斬新かつ独創的発想を追求推進するとともに、各種の国際記録に挑戦、その技術を実用車に適用するなどの手法により、我が国の自動車技術の急速な発展向上を実現させ、今日の海外における日本車の評価の基礎を築いた。その評価の程度は、特種な技術開発を要した昭和40年の天皇御料車の受注の例にみることが出来る。

その他具体例は、枚挙にいとまないが、同君の自動車技術開発への情熱は、社内における部下・後輩への指導、教育にとどまらず、自動車技術会活動への積極的な貢献となってあらわれていたことは、2万人会員のよく知る所である。

以上のように、同君の自動車技術の進歩発達への功績は真に顕著であるとともに我が自動車技術界の誇りとも考えられるものであり、技術貢献賞の候補者としてふさわしいものと考えられる。

#### (2) 中村良夫君

中村良夫君は、戦後、自動車工業に身を投じて以来、一貫して研究開発に従事し、自動車技術の発展に大きく貢献してきた。

特に、自動車技術の真髄の凝縮ともいべきF-1国際レース用レーシングマシンの研究開発にあたっては、日本においては未踏の分野であるための多くの技術的困難を、優れた技術の適用と多大の創意と工夫によって克服し、世界に伍し得る技術的に優れたレーシングマシンを完成せしめた。ドイツGPに初出場以降は、レーシングチームの監督として、技術を含めたリーダーシップをとると共に、マシンの熟成に熟意を注ぎ、レース成績においては、メキシコGP(昭和40年)、イタリアGP(昭和42年)で優勝を果たすなど、数々の成果をあげると共に、開発技術の一般車へのフィードバックをも含めて、日本の自動車技術の進歩・発達及びその高揚に著しく貢献した。

更に、同君は、本会の理事に就任以降、自動車技術の国際交流の推進に、献身的な努力を傾注し、ISOのTC22/SC22の議長として標準化を通じて二輪車技術の向上に努め、又、FISITAの副会長としては、その目的である技術交流と各国自動車技術会の相互連携による、自動車技術の国際的進歩向上に努めてきている。

特に韓国、インドネシアの自動車技術会の設立と中国を含めた国々のFISITAへの加盟に尽力すると共に、日豪の両自動車技術会による自動車技術会議、及びこれが発展したIPCの創設運営に積極的に寄与し、途上国の自動車技術の向上に大きく貢献するなど、その広範囲で国際的な活躍は、我が国はもとより、海外においてよく知られ高く評価されているところであり、同君のFISITA DIPLOMAの授与、BPICMの副会長、会長の歴任はその一つの証左でもある。

このように、同君の先進性による、国際場裡に目を開いた技術開発と協力推進が世界の自動車技術の進歩・発達に与えた貢献は真に大きく、又、我が国の自動車技術者に今後の針路を明示した功績は顕著であり、技術貢献賞の候補者にふさわしいものと考えられる。